

「お仕事」と「お仕事ガール」をめぐって

小林 美恵子

1. 「お仕事」ということば

2004年8月25日、朝日新聞文化総合欄に『「お仕事ガール」狙い雑誌続々』と題した大きな記事が載った。これは9月～10月に発売される女性雑誌を紹介したもので、9月7日にマガジンハウスより発売される『BOAO（ボアオ）』の広告主向け媒体資料表紙の「お仕事ガールの新ファッション・マガジン」という大ロゴや「27歳から35歳の女性を応援」というコンセプトを、前掲の見出しによって紹介している。同紙によれば、「20代後半から30代前半の働く女性たち」の消費意欲の強さに注目したこのような雑誌が今秋次々と発売されるとのことであった。

「お仕事ガール」は耳慣れないことばであるが、「お仕事」という言い方は最近よく目にする。従来、「お仕事」には次の2つの使われ方があった。

1. 他人（相手）の仕事について言う場合の敬語（尊敬語）として

「お仕事は何ですか」「お仕事、お忙しいのでしょうか」

2. 幼児語的な丁寧語として

「お父さんはお仕事に行ってるの」「カロリーヌとおしごとロボット（児童書名）」

最近目にする「お仕事」は1のような尊敬語ではなく、むしろ2を大人の世界にまで広げ、自分の仕事や一般名詞としても用いる丁寧語としての「お仕事」である。「仕事」をあえて「お仕事」と称するのはどのような人々か。「お仕事」はどのような場合に用いられるのか。そこにはどのような世相や人々の心情が反映しているのか。「お仕事ガール」をきっかけに考えてみた。

「お仕事」の語が一般に広がったのは1996年のTVドラマ、病院を舞台に失

敗ばかりしている看護師を主人公とするコメディ『ナースのお仕事』あたりからであろうか。本稿を書くにあたり、78人の高校2年生に「お仕事」を含む言い方で知っている語を聞いてみたが、トップにあがったのはこの「ナースのお仕事」ということばだった。やや古いドラマではあるが、シリーズ化され、映画化もされたので若い高校生にも印象を残したのであろう。

筆者の住む地域の市立図書館で題名もしくは副題に「お仕事（おしごと）」を含む図書を検索したところ37冊が見られた。このうち児童書8冊を除く29冊の題名に含まれる「お仕事」の内容は次のようなものである。

電車運転士 料理人 セカンドビジネス OL 文化財 会社員 ナース・看護婦(師)3例 SEX 競馬 公務員 車掌 出版社 主婦 「奥さん」のパート 精神分析 トイレ 食べる パソコン・インターネット 海外OL 医療ソーシャルワーカー 傭兵 大工

「セカンドビジネス」「パート」「食べる」などのように職種を限定できないものも含まれるが、それにしても珍しい仕事であろう「傭兵」などというものも含め職種が多岐にわたっていることがわかる。これらのうち最も古い出現例は1983年出版の『ニューヨークでお仕事いかが 私の海外OL学』（野辺地真理・三修社）というものであるが、これは「いかが」と相手に呼びかけている形から尊敬語と見るべきかもしれない。次に古いのは『最新お仕事事情 女性がプロになれる』（播摩早苗・ビジネス社・1995）でこれ以後『ナースのお仕事』（江頭美智留、波多野鷹・フジテレビ出版・1996）を含め「お仕事」を書名に含む本が続々と出版されるようになる。「仕事」はこのころから「お仕事」と丁寧語化されてきたということになる。

2. 『BOAO』に見る「お仕事」と「お仕事ガール」

さて、9月に入って実際に発刊された『BOAO』を見てみる。この雑誌は全390ページ、うち358ページは写真中心のいわゆるグラビアである。それ以外の32ページも写真図版を多用したビジュアルな作りで、グラビアとほとんど紙質の変わない上質紙を用いて贅沢な体裁である。値段は620円。体裁

の割に安いこの値段はもちろん広告掲載によるものである。

表紙は女優・松島奈々子の写真。テスト版の表紙イメージにあった「お仕事ガールの新ファッション・マガジン」のかわりに「ひと目惚れジャケットで秋おしゃれダッシュ！」というのがもっとも大きな見出しコピーになっている。このような雑誌によくあるように、表紙には内容を表す大小とりまぜ13の見出しが書かれているが、そのうちに「お仕事デニム ⇨ お出かけデニム」「お仕事バックは“ちょっと派手め”で」と2つの「お仕事」という語が含まれている。

目次はおおよそ大・中・小3種類の活字によって構成されている。大活字で紹介された記事は23、このうち13は「ファー、ブラウス、ロングカーデ、膝スカ。4大“即買い”服で、秋の流行ダッシュ!」「『セクシーシューズ』で、美脚のフィニッシュ!」といった、商品を並べたりモデルが身につけて紹介する記事。前掲の「ひと目惚れジャケット」「お仕事デニム」「お仕事バック」もここに含まれる。13のファッション商品紹介記事の他は女優・女優へのインタビュー記事や美容に関する記事、有名人の対談などだが、インタビュー記事の主人公は毎ページ違った衣裳をつけ、美容記事でも各ページに商品としての化粧品が紹介がされ、対談者はブランド提供の衣裳をつけているといった具合で、全ページこれ広告という感がある。

中活字の目次は連載記事などの紹介で、連載小説やエッセイ、新刊書や音楽・映画の紹介、占い、次号予告などが載せられ、広告臭は比較的少ない。小活字の見出しは27、見出しの文字が小さくても、必ずしも記事が自体が小さいわけではなく、何ページにもわたっている記事もある。目立つのは『パッソ』と行く賢いショッピング」「便利さと快適さを秘めた『P506iC』』といった特定の商品やブランド名をあげた記事で、27のうちに19もある。なお、巻末近くには記事で紹介された商品のブランドショップの電話番号一覧が掲げられ、ここには333のショップが掲載されている。

目次に掲げられた記事は大・中・小合わせて70あるが、このうちなんらかの形で「仕事」に言及している表題は6例。先にあげた「お仕事デニム」「お仕事バック」の他に「お仕事再開! 久しぶりに登場!!」という松島奈々子

へのインタビュー記事の副題、林真理子・安藤優子の対談に冠せられた「最強のお仕事レディ対談」、同じ林真理子の短編読み切り小説「第一話広告代理店勤務・石川絵里子の場合『ウーマンズ・アイランド』」、特集記事「キャリアを磨いてラッキーを掴む！お仕事ガール“絶対サクセス”の掟」の4例である。6例のうち5例までが「お仕事」の語を含んでいる。

記事本文中に現れる「お仕事」は14例（1例は「オシゴト」とカタカナ表記）。「お仕事ガール」2例、「お仕事モード（仕事に入っている状態とか、そこで身につけているファッションのスタイルを指すようだ）」3例、「お仕事バック・デニム」など下に具体的な品物名をつけたもの3例、「お仕事関係」「お仕事限定」「お仕事中」各1例と、11例は造語成分として用いられている。いっぽう「仕事」の場合は「仕事が楽しくて・・・」「仕事に対する意欲が減退・・・」のように独立した1語として使われるのがほとんどで、造語成分としては「仕事場」（2例）が見られるのみ。もちろん使用例は「仕事」のほうが多い。「お仕事」が独立して使われている3例は「お仕事&お出かけ（ファッション）」「お仕事ではくだけすぎない印象に」「『マニックス』のパンツならオシゴトにもいい風が吹いてきそうなインスピレーション」というもので、ファッションについて語る文脈で使われている。このように「お仕事」は、仕事そのものより仕事にまつわる雰囲気やその場でのファッションを示す語の一部として用いられることが多い。

なお、この雑誌の記事中には仕事に関する語として「ビジネスシーン」2例、「オフィスシーン」「オフィスタイル」「オフィス服」各1例などが見られた。また職業を持つ女性を表す語として「お仕事ガール」の他に「オフィスガール」「キャリア女性」「都会で働く女性」各1例などが見られ、「ワンランク上の女」「大人の女性」「お嬢様モード」「女優スタイル」などの形容も見られる。

3. 他の「職業を持つ女性」向けの雑誌の用語

次に職業を持つ2、30代女性向けと考えられる他の雑誌についても「お仕事」や「お仕事ガール」がどのように現れるかを調べてみる。調査したのはファ

ッション雑誌2 (『O g g i』『MAQU I A』) 総合誌1 (『日経ウーマン』)
就職情報誌3 (『好きを仕事に』『DODA』『サリダ』) の6種で、いずれも
2004年9月に店頭に並んだ号である。

『O g g i』(10月号・小学館) 92年に20代の働く女性向けに発刊されて成
功を収めた雑誌。『BOAO』はいわば、30代になった『O g g i』の読者を
対象として取り込もうとしているとも言える雑誌で、実際この2誌は出版社
も別なのだが体裁・雰囲気ともよく似ている。この雑誌に現れた「お仕事」
は『お仕事ジャケット』vs『華やかジャケット』ワザあり対決」という見出
しとその記事に含まれる「『お仕事』シーン」「『お仕事』vs『華やか』」のみ。
使われ方は『BOAO』とよく似ている。

『MAQU I A』(11月号・集英社) この時期に創刊された働く女性向け
雑誌の一つ、全424頁すべて美容記事や化粧品紹介という雑誌。メイク法の実
際を収録したDVDや化粧品の付録付きで500円(創刊特価)という安価にも
驚く。働く女性対象とはいっても、この雑誌には女性自身の職業への言及は
見られず「お仕事」を含む語も皆無。

『日経ウーマン』(10月号・日経ホーム出版社)「仕事を楽しむ 暮らしを楽し
む」という副題がついている。「資格&お稽古」「心と体のアンチエイジ
ング」など内容的にも仕事より仕事をしている人の暮らしに重点を置いている。
表紙に「お仕事別に選んで見ました この秋買いたい! 仕事靴&バック51」
という見出しがあるが、「お仕事」出現はこの記事の1例のみ。

『好きを仕事に』(『ケイコとマナブ』8月号臨時増刊・リクルート)「私の
『好きかも』を仕事にする・・」ということできざまな職業を紹介している。
トップに「心理テストでわかるあなたにぴったりのお仕事」という記事があ
り、表紙にもこの見出しが載せられている。この場合の「お仕事」は「あな
たの」であるから敬語として使われているとも考えられる。次に「必ずある!
私の好きを仕事にする方法 175人のなり方成功例!」という特集があり、そ
こには「仕事の悩みや疑問に答える! 編集記事」「意外と知らないお仕事バ
リエーション! お仕事図鑑」「先輩の成功のヒミツが満載! お仕事カタログ」
という3つの小見出しがある。さらに「衣・食・住に関する仕事」「社会と人

に関する仕事」「アート・マスコミに関する仕事」「外国・旅行に関する仕事」「自然・動物に関する仕事」「PC・インターネットに関する仕事」などの項目をたててさまざまな仕事を従事者の体験を語るという形で紹介している。ほとんどは「仕事」ということばで語られているが、「人気の医療・福祉のオシゴト事情教えます」「憧れの語学のお仕事をする方法」「フラワー・ショップ&ペットケアショップのお仕事体験レポート！」など幾つかの職種は「お仕事」と称されている。雑誌後半はおもに転職のための資格・技術を習得できる各種学校の紹介だが、ここには「お仕事」は使われずもっぱら「仕事」である。この雑誌は特に女性対象と銘打ってはいないが、紹介されている職業従事者の写真は日本語教師の1人を除いてすべて女性であり、ほぼ女性を対象としていると見てよい。

『DODA』（9月15日号・学生援護会）「キャリアが見える『転職データベースマガジン』」要するに求人情報カタログである。表紙は若い女性の写真だが、記事中の写真やイラストには男女の姿があるので、特に女性のみを対象とした雑誌とは言えないだろう。「やりがいのある仕事！」「あなたらしく仕事に取り組んでください。」「安心して仕事のできる環境です」など各求人記事は一般に「仕事」という語で語られるが、1例のみ「リノス・スタッフィングで、派遣のお仕事してみませんか！？」「登録からお仕事スタートまで」「お仕事の紹介」など、すべて「お仕事」で通す広告記事がある。

『サリダ』（9月13日号・サリダ・アド）表紙に「キレイを作り出す！美容師のお仕事全紹介！」という見出しがある。『DODA』と同じく求人情報誌である。「美容・理容」のほかに「人材派遣」「ビューティーワーク」「ケアワーク」などに重点がおかれ、写真図版の人物もほとんどは女性で、おもに女性を対象としている雑誌と見られる。「お仕事」という語を見出しに含む記事（求人広告を含む）は6例、見出しにはないものの記事中の用語を「お仕事」にしている例もある。いっぽう「仕事（シゴト）」を見出しに含む記事は4例で、『DODA』とはやや違う傾向である。「お仕事」とされるのは美容師、エステシャン・看護師、着物学院のインフォメーション、銀行関係のパソコンワーク、派遣スタッフなどだが、「仕事」のほうも具体的に職種を提示し

ているのは理美容師、エステシヤンなどで「お仕事」との間に示される職種の違いはないように思われる。

このように「お仕事」はファッション誌ではスタイル・ファッション関連で、就職情報誌では尊敬語との曖昧な領域で使われている。職種はほとんど選ばない。しかし医師、弁護士、教師などのいわゆる専門職を指した例は見られないし、農業、工場労働者などを指した例もない。

4. 「お仕事ガール」のイメージ

以上の6誌には「お仕事ガール」の語は見られなかった。インターネットのweb検索で「お仕事ガール」の語を探してみると10例が見出された。そのうち4例は『BOAO』関連のサイトである。他に『ef』（主婦の友社・11月号）関連で2例、女優・水野美紀の活動を報告しているサイトに1例、レディスパンツ（ズボン）の通販サイトに1例、さらに個人が開いていると思われるHPが2例であった。その使用例は次のようなものである。

- ・お仕事ガールの収入にしては分不相応な所に住んでいたりもしたから、貯金もしなくちゃね (<http://homepagel.nifty.com/aferservice/>)
- ・お仕事ガールというのはマリコが自分の身分を称している言葉だった。頭文字をとるとOLになるが、フリーターという言葉が余り好きではなかったマリコが自分の立場を揶揄するように作った言葉のようだった。（同上・以上2例は「日常感情劇場」と題されたエッセイの一節）
- ・きりこちゃんはお仕事ガールの一般人なのでサイトはありません。
(<http://cyc.cool.ne.jp/index.html>・「きりこ」のイラストを紹介している)

ここでの「お仕事ガール」はあまり収入も高くない「一般人」のOLやフリーターが「自分を揶揄して」言っている語というイメージである。

次に筆者の周辺の2、30代で職業を持っている女性8人（20代5人、30代2人、40になったばかりという人1人）に「お仕事」「お仕事ガール」という語に対する感じ方を聞いてみた。まず7人のうち「お仕事ガール」という語を

聞いたことがあるとするものは30代の1人(出版・編集)・20代1人(博物館学芸員)で、それぞれ「雑誌『BOAO』にて」「ファッション雑誌で」とのこと。他の6人は「知らない」「聞いたことはない」と答えた。「お仕事ガール」という語についてどう感じるか、という問いに対しては

- ・古いイメージ。死語、もしくはオバチャン用語(20代商社社員)
- ・キャリアを積むとか専門職のイメージではない。学生の延長、腰掛けの感じ。「うちの女の子」という感じ。(20代社会福祉士・施設勤務)
- ・「お+仕事」に違和感がある。「お」がつくと幼い感じ。「ガール」となるとティーンの女の子をイメージする。最初は「お仕事ガール」=「ドール?」=風俗?なんて勝手に想像してしまった。「キャリアウーマン」とバリバリ仕事をしているイメージがあるから、それを柔らかくした言葉なのかなと思うが、柔らかくしすぎて中身がない感じ。私は造語失敗例だと思う。(30代編集・出版)
- ・何か感じが悪い。いい感じではない。(40代商社社員・30代郵便局非常勤)

など、あまり評判がよくないが、いっぽう、

- ・キャリアウーマンということばよりかわいく、きつくない感じがする。(20代貿易事務派遣社員)

という感じ方もある。「自分がこう呼ばれたらどうか」という問いに対しても「感じが悪い」「バカにされている気がする」「能力より軽く見られた感じ」「仕事をしているのは当たり前のことなのという違和感を覚える」「ガールと呼ばれる年代ではないからあまりいい感じはしない」と否定的な答えが多かったが、この派遣社員ともう一人の20代の美容師だけが「かわいらしく嬉しいが恥ずかしい気もする」「照れくさい感じ」と答えた。この2人も含め全員が自分の仕事を称して「お仕事」と言うことはないという。また一般名詞(丁寧語)として使われる「お仕事」については、

- ・水商売っぽい。その仕事に自ら取り組もうと思っている仕事ではないよ

うな感じがする。(40代商社社員)

- ・正しくはないが、私や私の部下の世代は丁寧に言おうとして、「お」の過剰使用になってしまうのだろう。(30代編集・出版)
- ・言う人の丁寧な人柄が感じとれる。(20代貿易事務派遣社員)

と、三様の評価が見られる。

次に、都立高校2年生78名(女子66名・男子12名)に、職業を持つ女性を表す「職業婦人」「ビジネスガール(またはBG)」「オフィスレディ(またはOL)」「キャリアウーマン」「オフィスガール」「キャリアガール」「お仕事ガール」の6語について知っているか、またそれらの語のイメージとして「若い」「大人」「古い」「新しい」「かわいい」「仕事ができる」「補助的労働」「管理職」「内勤」「出張・外勤が多い」「独身」「既婚」の12をあげ、幾つでも選んでもらうという形でアンケートを行った。表はその結果をまとめたものである。

職業を持つ女性を表す語(高校生78名への調査)

単位(人)

職業を持つ女性を表す語	知っているか			感じるイメージ(複数自由選択)											
	よく知っている	聞いたことはある	まったく知らない	若い感じ	大人の感じ	古くさい	新しい感じ	かわいい	仕事ができる感じ	補助的労働	管理職	内勤	出張・外勤が多い	独身	既婚
職業婦人	5	19	53	0	8	11	0	1	2	0	0	2	1	2	9
ビジネスガール/BG	3	28	44	14	3	1	3	0	0	0	0	5	10	7	0
オフィスレディ/OL	50	21	4	24	13	12	1	6	7	39	1	43	0	18	0
キャリアウーマン	44	26	3	7	35	1	3	0	62	0	2	8	27	29	4
オフィスガール	4	23	48	16	2	1	0	1	1	11	0	21	0	3	0
キャリアガール	2	12	62	7	4	0	1	4	7	1	3	3	0	1	1
お仕事ガール	0	4	72	1	0	6	0	0	3	2	0	0	1	0	0

現在では日常ほとんど使われない「職業婦人」「ビジネスガール」を3分の1から半分近い高校生が聞いたことがあるとするのは意外であったが、「知識」として知っているのであろう。「オフィスレディ」「キャリアウーマン」は「聞いたことがある」という者を含めほとんどが知っており、前者が「若い」「補助的労働」「内勤」、後者が「大人」「仕事ができる」「出張・外勤が多い」と対照的なイメージを持たれていることがわかる。「オフィスガール」「キャリアガール」についても「知っている」「聞いたことがある」というものが一定の数いる。前者に「若い」「補助労働」「内勤」が、後者に「仕事ができる」「管理職」が見られるのは「オフィス」「キャリア」に対応しているのだろう。また、「キャリアガール」には「キャリアウーマン」に比して「若い」の割合が高く、「かわいい」という印象も見られるのは「ガール」の語感によるものと考えられる。

「お仕事ガール」を聞いたことがあると答えたのは78名中4名にすぎなかった。その印象についてもさまざまであるが、「その他」として自由記述で書いたものの中に「バカっぽい」（2例）「アホっぽい」「キモチ悪い」「危ない感じ」などとしたものが目立ち、この語が高校生にもあまり印象の良いものとして受け取られなかったことが察せられる。「オフィスガール」についても「バカそう」という記述が1例あったが、「ビジネスガール」「キャリアガール」についてはこのような印象をもつものは皆無で、「お仕事ガール」の悪印象は「お仕事」、もしくは「お仕事」と「ガール」が結びついたことによるものだと考えられる。

5. 「お仕事ガール」発生の意味

以上から「お仕事ガール」は実際によく使われている語ではなく、比較的よく使われる「お仕事」に従来女性を指すのに使われた「ガール」が結びつき、ファッション雑誌などのマスコミやインターネット上の惹句として作られたことばなのだと察せられる。「お仕事」が仕事内容そのものよりも、それに伴うファッションやまつわる漠然とした雰囲気などを表すことは前述した。「オフィス～」が職場での補助的労働、「キャリア～」が総合職的な企画・統

括というように一応「仕事」そのもののイメージを含むのに対し、「お仕事」にはそのようなイメージは希薄である。したがって広い範囲の仕事について言うこともできるのである。別の言い方をすれば「中身のない」仕事のイメージであり、これが未熟な女性を表す「ガール（少女）」と結びついたときに2、30代の女性が「お仕事ガール」に持つ「呼ばれてバカにされた感じ」とか高校生の言う「バカっぽい」という印象が生まれるのだろう。

このように印象が良いとはいえない語がファッション雑誌の惹句になるのかとの疑問も湧くが、仕事や働き方が多様化し、しかもどのような職業についてもなにかと厳しい現況では、女性たちは仕事そのものにおいてではなく、周辺のファッションとか雰囲気とかにおいてしか共通性や共感を持ち得ないのかもしれない。「27歳から35歳の女性を応援」としてこの秋発刊される多数のファッション雑誌はまさにそのようなファッションや雰囲気を整えるための消費意欲を応援し、働く女性を中身のない未熟な「お仕事ガール」のイメージに押し込めるわけである。「バカにされた気がする」と言いながらこのような雑誌を買う女性たち、自らを「揶揄している」としながら「お仕事ガール」を自称する女性たちの中に自らの「仕事の空洞化」の意識があることも否定できないだろう。一時代前、多少揶揄の気味はあるが「キャリアウーマン」の語で企画や統括の世界への女性の進出を認めざるを得なかった社会が、今ジェンダーフリーへの猛烈なバックラッシュの一環としてこの「お仕事ガール」という語を持ち出してきたのだという気がする。

10月またもや創刊された雑誌『ニキータ』（11月号・主婦と生活社）は「コムスメに勝つ!」「艶女（アデージョ）」のための雑誌とのこと。これに対する男性は「艶男（アデオス）」だそうで、いよいよファッション・美容でツヤツヤと美しく、仕事よりは「お仕事」の世界に棲息する日本の働き盛りの2、30代の女（と男【オス】）の生き方が強調されるのである。

（こばやし みえこ）